

# 中国の詩話、日本の詩話

和田英信

## 一 詩話とは何か

詩話とは何か。まず確認しておくべきことは、詩話とは歴史的産物であるということ。詩話はそれを生み出した歴史的背景、文学環境の相違によって、さまざまな様相を見せる。その多様な姿をすべて詩話と称してきたことが、「詩話とは何か」という問題を複雑にしてきた要因である。そこで、歐陽脩によつて生み出された最初期の詩話の本質的性格を確認し、さらにその歴史的変容を時間軸に沿つて視点をぶらすことなく辿るならば、この問題はある程度までつきりするようと思う。

歐陽脩の『詩話』は、詩人や詩に関する逸事を語るものである。こうした内容の著作は、時間を遡つて宋代以前にも見出すことができる。劉宋の『世説新語』(とくにその「文学」篇)はその先駆的なものと見なすことができようし、唐末の『本事詩』、『雲溪友議』などは、もっぱら詩や詩人の逸話を内容とするものとして、『詩話』の直接的な始祖として捉えられることが少なくない。

『詩話』に先行するこれらの作品・著述に共通することは、いざれも史伝（歴史叙述）のスタイルをとつてゐる

点である。できごとの報告を主たる内容とし、語り手は原則としてその姿を見せることなく物語内容を報告する。これに対し、歐陽脩『詩話』もまたできごとの報告を基本的内容とするものには相違ないのだが、匿名の語り手ではなく、歐陽脩自身が語り手となつて知友に語りかける叙述形式をとる。形的には、語り手自身を指示する「余」、語り進める現在を指示する「今」という語が多く見出される点に、その特徴は現れる。

すなわち歐陽脩『詩話』とは、歐陽脩による物語行為を再現した、文字通りに「詩のはなし」なのである。江戸時代、十九世紀の初頭に刊行された菊池五山の著作『五山堂詩話』に付された葛西因是の序に見える次のことばは、「詩のはなし」としての詩話の性格（内容と叙述形式）を甚だ的確に捉えたものということができる。

話桑麻者、農夫樂事也、話利市者、商賈樂事也、話詩賦者、詩人樂事也、話也者、非論非議非辨非彈也、平常說話也、有是話而人聞之喜之快之笑之記之忘之、一任旁人所取、是話者之心也、……當開口說話之時、暫有是話、及閉口說完之後、曾無是話、話之爲話、如是而已、今話而筆之、此果何心哉、農商不識文字、故其話止於口頭、終於一場、僅及對面數人、詩人則識文字、故把口頭之話、化作筆端之話、把一場之話、化作千萬場之話、把對面數人、化作不對面數萬人、唯恐聞之喜之快之笑之記之忘之者之不多、是詩人之心而詩人之神通力也<sup>(1)</sup>

唐以前の詩や詩人の物語は、いわば「史（*histoire*）」として語られたものであつたのだが、歐陽脩はこれを、今まさに眼前において語り進められる「話（*discours*）」としてテクスト化したのである。この「話」のスタイルは、物語内容（話題）と同時に話者（著者、歐陽脩）と聞き手（読者）の存在、さらにはこれら三者間の連續性を強

く喚起する。語られるのは多く歐陽脩の知友の話題であり、聞き手として想定されるのも、同じ世界に身を置く存在であろう。事実『詩話』は、著者歐陽脩を中心とした人間関係がその記事のなかに反映し、梅堯臣・蘇軾・石曼卿など、直接の知友の姿と彼らにまつわる逸話が、そこに描かれる世界の大きな部分を占める。その記事の多くは、彼らの交際のなかで実際に手渡され交換されたものであつたと想像される。

『詩話』成立の意義は、まずひとつにはそれが、従来の文論では描き出し得なかつた、いかに作品が作られ読まれるかという、創作と受容の場の具体的な諸相を伝える新しい表現の器となつたことにある。そして『詩話』の文学史的意義のいまひとつは、北宋期に成立した官僚文人の社会、その人と人との密接なつながりのなかで、彼らに共有される話題の場、あるいは士人間の情報の交流を担う新しいメディアとして『詩話』が機能したこと認められる。「口頭之話」「一場之話」が「筆端」に書き留められたことによつて、「千万場之話」と化していくたのは、まさに北宋期における詩話隆盛のさまで他なるまい。

かくして歐陽脩をとりまく人々のつながりが『詩話』を生み出したように、北宋期に成立した広範かつ緊密な士人社会のネットワークが、『詩話』の出現以降、かず多くの「詩話」を書き継いでいくこととなる。彼らの話題の場としての詩話、情報交換を担うメディアとしての詩話の集積のありさまは、胡仔『苕溪漁隱叢話』に集約的に見ることができる。話題ごとに積み重ねられた彼らの発言の集積は、あたかも現代のネット上における掲示板のごとき様態を呈している。

本来の詩話とは、こうした北宋期の文学環境において生み出され行われた、すぐれて歴史的な産物である。それゆえ、詩話との内容的類似点のみをとつて、『世説新語』あるいは『本事詩』等までもこれを詩話と呼ぶとするならば、それは一種のアナクロニズムと言うべきではあるまい。むろん『詩話』（およびその後繼詩話）が生み

出された背景には、詩や詩人の逸事を語る行為に対する、唐代あるいはそれ以前からの根強い関心の流れがあるだろう。しかしながら、『詩話』およびその後継作が、右にみたように、それ以前の著作とは異なる叙述スタイルをとり、その文学環境にあつてその時代特有の機能を果たしたことは、やはり確認しておくべきである。

歐陽修によつて創られた詩話というスタイルの著述は、南宋期以降においても書き継がれていつたわけだが、それと同時に、南宋期以降の詩話においては、その文学環境の変化に基づき、北宋期の詩話とは異なる様相・性格を有するものも見られるようになる。たとえばその特徴を端的に示すものとして、啓蒙的口吻を指摘することができるだろう。そこには特權的な高みにたつた書き手からの、多くの読者に向けてのメッセージ性をはつきりと読み取ることができる。そしてこの場合の読者とは、南宋期に増大した新たな詩の享受者層にほかなりまい。南宋期を代表する詩話である『滄浪詩話』には、江湖派に対する激しい批判が見出されるのだが、このことは、著者嚴羽がそのメッセージ対象として強く意識しているのが、とりもなおさず江湖派の人々にほかならないことをものがたつてゐる。

いま一つ指摘しておくべきは、北宋文学（とくに蘇軾・黃庭堅）の達成とそれに対する評価の成熟である。北宋期の詩話においても、蘇黄の文学は中心的な話題のひとつではあつたが、それは詩話の作者・読者と時間的にも連續した同時代人の話題にほかならなかつた。これが南宋期にいたると、古代から当代に到る詩の歴史のなかに位置づけられる要素の一つとなり、とりわけ唐詩との対比に基づく詩史的批判の対象として多くとりあげられるようになる。その先駆けとなつたのは張戒『歲寒堂詩話』であるが、文学史的視点にたつたうえでの蘇黄批判は、その後、『滄浪詩話』をはじめとする文学史的言説、あるいは唐宋比較論に受け継がれていくこととなる。「唐宋之爭」はその後、清代に到るまでの詩論（あるいは詩話）の中心的主題のひとつとなつたが、その成立のきつ

かけとなつたのは、言うまでもなく唐詩との比較に価する宋詩の成就・達成であろう。

いざれにしろ、こうした詩論的要素を多くもつ著作もまた「詩話」と称して行われるようになつたため、ときに詩話の変容の背景にある歴史の流れが無視・捨象され、多くの詩学著作が時代を遡つて詩話と見なされる現象が見られるようになつた。また同時に、詩話として著された著述のみならず、詩をめぐる言説がひろく詩話と称して流通するようになる。こうして見たばあい、詩話とは著述の一カテゴリーであるばかりではなく、ひとつの中文学現象ともいいうべきではあるまいか。以上、詩話とは如何なるものかを確認したうえで、次ぎに項を改めて日本の詩話について見ていく。

## 二 日本における詩話

日本は古来、中国の文化・文学を受容しつつ、自国の文学を作り上げてきたわけであるが、その際一貫して、漢語による詩作や著述が、文化的的當為において何よりも上位に位置するものと見なされてきた。日本にとって中国の文学とは、仰ぐべき規範にほかならなかつた。ここで目をとめておきたいのはそうした文化受容に際しての時差である。上流に位置する中国から下流の日本に文化が流れ込むまでには、つねに一定の時差が存在した。江村北海（一七一三～一七八八）の『日本詩史』は、右のような事情を歴史の流れに沿つて次のように概括する。

余謂明詩之行于近時、氣運使之也、請詳論之、夫詩漢土聲音也、我邦人不學詩則已、苟學之也、不能不承順漢土也、而詩體每隨氣運遞遷、所謂三百篇、漢魏六朝、唐宋元明、自今觀之、秩然相別、而當時作者則不知其然、而然者、氣運使之者、非耶、我邦與漢土、相距萬里、割以大海、是以氣運每衰于彼、而後盛于此者、

亦勢所不免、其後于彼、大抵二百年、胡知其然、懷風凌雲二集、所收五言四韻、世以爲律詩、非也、其詩對偶雖備、聲律未諧、是古詩漸變爲近體、齊梁陳隋、漸多其作、我邦承其氣運者、稽其年代、文武天皇大寶元年、爲唐中宗嗣聖十四年、上距梁武帝天監元年、凡二百年、弘仁天長、鬢鬚初唐、天曆應和、崇尚元白、並題勉乎二（一二字、底本闕）百年之後、五山詩學之盛、當明中世、在彼則李何王李、唱復古於前後、在此則南宋北元、專傳播於一時、其距宋元之際、亦二百年矣、我元祿、距明嘉靖、亦復二百年、則七子詩、當行於我邦、氣運已符、（卷四、荻生徂徠条<sup>(2)</sup>）

『懷風藻』は日本における現存最古の漢詩集で天平勝宝三年（七五二）の序を有する。その『懷風藻』に入集する文武天皇の大宝元年（七〇一）は中国の嗣聖十四年（實際は十八年）に当たり、梁武帝の天監元年（五〇一）からおよそ二百年。嵯峨天皇の弘仁（八一〇～八二四）・天長（八二四～八三四）の詩は初唐の詩に似ており、村上天皇の天曆（九四七～九五七）・応和（九六一～九六四）年間には中唐の元稹・白居易の詩を貴んだ。中国明代、前後七子が復古を提唱していたころ、日本の五山では宋元の詩風が流行。元祿年間（一六八八～一七〇四）にいたつてようやく、七子の詩風が日本において行われるようになる。いざれも二百年の隔たりをへて、中国の詩風が日本において流行を見るようになつたことを指摘する。

興味深いことに、五山の僧、虎闘師鍊（一二七八～一三四六年）によつて詩話の名をもつ最初の著作『済北詩話』が著されたのも、歐陽脩『詩話』が作られておよそ二百年あまり後のことであつた。しかしながら日本には北宋期の士人社会に相当するものは存在しなかつた。『済北詩話』は、當時の中国文化受容の最前線であつた五山における孤立した存在に終わったのである。日本において詩話が多く作られ行われるようになるには、さらに時

代が下つて江戸時代、とくにその後半期を待たなければならなかつた。『詩話』成立から江戸後期の文化・文政年間に到るまで、およそ七百年。南宋後半から数えても、ほぼ六百年。すなわち時差は著しく拡大するのである。

さきにも述べたように日本には北宋期の詩話に相当する著述群は存在しない。いうまでもなく、それを生み出す文学環境が存在しなかつたからである。いっぽう大雜把にとらえるならば、江戸期の詩話隆盛をもたらした背景には、南宋期の詩話隆盛の背景に似通つた点が多々認められる。漢詩文の享受者層の増大、出版事業の普及などが、その主たる要素であるが、またたとえば、「遊歴」と称し、地方の漢詩文愛好家（これはいうまでもなく富裕な階層の人々）のあいだを渡り歩き、彼らをパトロンとして生計を維持する少なからぬ職業文人の出現もまた、南宋期の文学環境に類似する現象と見なせよう。

先に引いた江村北海『日本詩史』の記述にも見えたように、元禄・宝永以降、荻生徂徠（一六六六～一七二一八）やその門弟服部南郭（一六八三～一七五九）らの主導により、明の七子に倣つた唐詩の学習・模倣が提唱され、いわゆる古文辞学が一世を風靡することとなる。こののち、山本北山（一七五二～一八一二）の『作詩志穀』（天明三、一七八三年）による性靈説の唱道が江戸後期における宋詩勃興の契機となり、市河寛齋（世寧、一七四九～一八二〇）の主宰する江湖詩社の詩人たちの活動がさらにその流れを推し進めたことは日本漢文学史の常識となつてゐる。この江湖詩社の中心的な同人、菊池五山あるいは柏木如亭、大窪詩仏らは、いずれも「遊歴」の経験を有する典型的職業詩人であつた。菊池の『五山堂詩話』には次のような一節がある。

人生聚散亦復難常、二十年間江湖社、一離一合、吟席殆無暖日、乙巳余歸江戸、如亭見贈云「葉水心初出宦途、四靈復聚舊江湖」、蓋以余當水心也、後寛齋先生祇役越中、如亭去赴信中、余亦出關、獨詩仏留在江戸、

如亭寄詩云「結社都門相唱者、半江翁（寛斎）北五山西、竹埋深雪無生意、只有梅花照舊溪」、如亭一號瘦竹、詩佛一號瘦梅故也、余再歸則如亭猶在信中、每一聚首、未嘗無車公之歎也（卷一）

生計のため一所不休を余儀なくされた、いささか自嘲的な感慨が漏らされる一条。その際、自分たちを葉適および四靈に擬えているのは興味深い。ここに、彼らが身をおく文学環境と南宋期のそれとの類似を読み取るのは性急かも知れぬが、少なくとも自らの境遇を葉適および四靈に見立てる、その見立ての落ちつきの良さが、彼らの間で共有されていたことだけは認められよう。

江戸後期の文学環境と南宋期の類似性はこればかりではない。それは先に南宋期の詩話の特質をみる際にも触れたことだが、山本北山の『作詩志穀』の出現以降、「唐宋之爭」が日本においても詩のありかたを論じる際の中心的なテーマとして浮かび上がってきたことである。『作詩志穀』が、荻生徂徠らの唐詩尊重と唐詩模倣を偽唐詩として切り捨てて以降、清新性靈の發揮を主旨とする論調が、江湖詩社の詩人らによつて主張されるようになる。荻生徂徠以下、護園派が盛唐詩の排他的尊重を強く主張したのに対し、江湖詩社を中心とする清新性靈派は、詩の多様なありかたを肯定的に捉えるところにその特徴が認められる。具体的には宋詩（とくに南宋詩、あるいは中晚唐詩）に対する好尚によつて特色づけられると言つてよからう。これ以降、日本の漢詩壇にあつては宋詩風への志向が大勢を占めるようになるのだが、世上のこうした趨勢に対する批判的見解もまたしばしば提出された。こうした江戸期後半の文壇状況が、日本における詩話隆盛の背景となつたことは言うまでもない。

しかしながら、江戸後期を中国南宋期に相当するものとして、一元的に固定して捉えるのも実のところ無理がある。というのも、いつたん詩話成立・流行の基盤が整うと、こうした時差はまったく解消されてしまうことと

なるからである。たとえば江戸期を代表する詩話のひとつ、菊池五山（一七六九～一八四九）の『五山堂詩話』の刊行は、文化四年（一八〇七）からおよそ天保三年（一八三二）にかけて。この書は、揖斐高が指摘するように、袁枚『隨園詩話』に範を仰いだものであり、内容も叙述のスタイルも『隨園詩話』に類似する。自身の見聞を中心にして詩や詩人をめぐる逸事を採録し、またときに古今の詩人の詩句を取り上げて論評を加え、考証の言を交える。袁枚『隨園詩話』の刊行は乾隆五三（一七八八）年以降のことと思われるが、『商船載來書目』によれば、寛政三（一七九一）年にはすでに日本にもたらされている。文化元年（一八〇四）には和刻本『隨園詩話』が刊行。その後、ほどなく『五山堂詩話』が上板されていくこととなる。春の遅い北国では春の訪れがすぐさま夏に連続するよう、ここにいたつて中国の文化事情はさほどの時差をおかず日本江戸期の文壇に伝播するようになつたのである。こうした文化受容をめぐる時差の拡大と縮小にも、詩話という著述とそれが生み出されてくる文学環境との密接な関連がうかがえるであろう。詩話のあり方にはその時々の文学環境がすぐれて顕著に映し出されるのである。

ここで富士川英郎による、日本詩話の五分類を挙げておこう。<sup>(3)</sup>

- 一、詩とは何かという論議からはじまって、作詩の方法などを説いた、主として初心者のための入門書の類。祇園南海『詩學逢原』、三浦梅園『詩轍』など。
- 二、著者が自分の積極的な詩論を述べたもの。山本北山『作詩志穀』など。
- 三、中国の詩のなかに現れてくる難解な字句や動植物やさまざまな事物についての解説・考証などを記したもの。六如上人『葛原詩話』など。
- 四、日本における漢詩の歴史を述べたもの。江村北海『日本詩史』など。

五、中国や日本の古今の詩のうちから任意にさまざまな詩を選び出して、それに注釈したり、それについて感想を述べたりするとともに、詩人の逸事などを語っているもの。菊池五山『五山堂詩話』など。

この五番目に挙げられている菊池五山の『五山堂詩話』は、右にも触れたように袁枚『隨園詩話』に範をとつた著述であるが、この書こそ、作詩者層の増大、出版事業の充実・普及、これらにともなう詩をめぐる言説の商品化など、当時の日本の文壇状況を如実に反映した著述であった。この書は文化四年（一八〇七）の刊行当初から江湖の歓迎をうけ、ほぼ毎年新しい巻を重ね、足かけ二十六年のあいだに全十五巻の刊行をみこととなつた。

この菊池の著作に関しては、揖斐高による詳細な研究<sup>(4)</sup>があるので、ここでは『五山堂詩話』と同様、日本における詩話受容の、ある意味での成熟をものがたる著述のひとつ、古賀桐庵（一七八八～一八四七）の『非詩話』十巻を取り上げてみよう。

古賀桐庵、諱は煙、字季疇、桐庵はその号。昌平齋の御儒者として柴野栗山、尾藤二洲とともに寛政三博士と称された古賀精里（一七五〇～一八一七）の三男。少時より昌平齋に学び、文化六年（一八〇九）御儒者見習となり、やがて文化十四年（一八一七）、父の後を継ぎ御儒者となつた。「父子同番」の榮を称えられた官学派の代表的な学者・文人である（なお『作詩志穀』を著し、清新性靈の詩風を唱道した山本北山は、幕府による朱子学以外の学問・学風の禁圧、いわゆる「寛政異学の禁」に反対し、「異学五鬼」と称された一人であつた）。

『非詩話』は、文化十一年（一八一四）の自序を有し、その成立時期は『五山堂詩話』の刊行時期（一八〇七～一八三二）とほぼ重なる。そして古賀の執筆動機には、菊池の『五山堂詩話』あるいは彼を中心とする江湖社の活動、ひいては当時に文壇状況に対する強い批判意識が認められる<sup>(5)</sup>。

予八九年前、識見未透、亦好讀詩話、偶得清袁枚所著隨園詩話讀之、心已知惡其浮薄佻巧、實爲詩林蟊賊、但愛其奇新之論、纖巧之調、試倣而作之、未半歲、駿駿乎入於外道、聲調風格、全與往日不類、比自覺其非、漸漬既深、不可醫治、極力剗革、經二年、方始復故、信乎古人之言、從善如登、從惡如崩也夫、予之於隨園、特嘗試之也云爾、猶然若此、況心醉於明清之詩話乎、故錄以識昨非、且以警人（卷一「總論」<sup>(6)</sup>）

右の一条は直接には『隨園詩話』を批判するものだが、『五山堂詩話』がその範と仰ぐ『隨園詩話』をかくも口を極めて批判するのであるから、ここに菊池（あるいは江湖詩社）にむけての批判的メッセージを読み取ることは容易であろう。

卷二は「總論」、本書のエッセンス。ここでは、詩を学ぶ際の心構え、その段階・階梯、詩話を読み取ることの弊害、歴代の詩話の問題点、『非詩話』著作の主旨などが述べられる。

學者有志於詩、必先使其心中正無邪、然後從事於音韵聲律、此入詩之正法門路也、若乃其心未能中正無邪、而徒屑屑然音韵聲律之爲尚、是無源之水、無根之木、其與幾何、是故古之聖賢教人詩、必本之於心、使之去邪而存正、今之談詩者、沒身潛心於聲調字句之間、惟知以雕續粉飾取悅人目、此可以見詩道之日衰矣、又可以見世道之日下矣（卷一「總論」）

初學既篤信性情之說、其學詩之序、則首三百篇、次楚辭十九首、次漢魏諸家文選李杜、以漸及初盛中晚諸名家、反覆諷詠、循循不倦、則聲律格調、體裁結構、自然通曉、此皆古來儒先之常談、人之所同知、學詩之道、

盡于此、不待多言也、初學尤不可觀詩話、初學之時、識見未定、一耽嗜詩話、則沾沾然欲以字句之間見巧、以奇新之語驚人、安於小成、而不能大達、予閱於人蹈斯弊者衆矣、後生戒之（卷一「總論」）

侗庵の詩論は比較的シンプルである。詩とはその人の心性の吐露・反映に他ならないもの。それゆえまずは自らの人格の陶冶が肝要とされる。そしてそのうえに立つての詩の學習階梯として、『詩經』以下唐代にいたるまでの名作の諷詠が求められる。いっぽう、声調字句の纖巧奇矯の追求が戒められ、詩話はそうした形式的側面の雕鑄粉飾への嗜好を徒に煽るものとして否定される。

卷三以下は「詩話十五病」と題し、個別具体的な詩話の問題点を論じる。「説詩於太深」「矜該博以誤解詩意」「論詩必指所本」「評詩優劣失當」「稍工詩則自負太甚」「好點竄古人詩」「以正理晦詩人之情」「妄駁詩句之瑕疵」「擅改詩中文字」「不能記詩出典」「以僻見錯解詩」「以詩爲貢諛之資」「不識詩之正法門」「解詩錯引事實」「好談識緯鬼恠女色」。これら十五病は、いずれも各々の主題のもと、それに該当する詩話用例が掲げられ、次にそれを批判・否定する内容をもつ文献（これも詩話およびその類書である場合が多い）を引き、末尾に侗庵自身の按語が付される。

全書を通覧するならば、基本的には唐詩を宗とし、当今流行の宋詩風の纖巧奇矯を戒める論調が主調をなすが、詩の解釈にあたっては、決して道学者流の頑迷なりゴリズムに覆われてはいない。また「詩話主考證、雖無取於論詩、猶可取於證古」（卷二）というように、論述にあたっては先行文献の博搜に基づく事実考証が心掛けられ、その執筆姿勢の規範として『四庫提要』が意識されていたように見受けられる（事実、同書の引用が散見される）。要するに本書は、「詩話研究」と「詩話批判」という、ふたつの性格を重ね合わせた著述といふことができる。

前者のみに目をむけるならば、かりに「非」の一字を省き『侗庵詩話』と称しても決しておかしくはないのである。この詩話の研究書としての側面においては、その博搜と翔実な考証において、相当の水準に達しているものと判断されよう。

そしてもう一方の「詩話批判」としての部分は、実のところ詩話批判のかたちを借りた当時の文壇批判と言うべき性格が色濃く認められる。『隨園詩話』に対する強い嫌悪感の表明は先にみたとおりだが、たとえば数多い詩話の中で例外的に評価されるものがないわけではない。

惡而知其美者、君子之公心也、歷代詩話、汗牛不啻、其鐵中錚錚者、獨詩品滄浪詩話懷麓堂談藝錄而已、就中惟滄浪當一世憤憤之際、能唱宗唐之說、以喚醒群迷、其詩不足觀、其識可稱、顧其論、誠有不免於過當者、是以近世有糾謬之作、然予終不以此易彼也、自餘三家、比滄浪稍遜焉、然亦於詩道有所得、故其言自別、在諸詩話中、奚啻鶴群見鶴、學者經史餘暇、欲觀詩話、則惟此四家可也（卷二「總論」）

右に挙げる四著作、なかでも『滄浪詩話』に対する評価は、もちろん直接にはその成就や価値に対してものではあらうが、同時に『非詩話』執筆当時の江戸文壇の状況に照らしてみると、江湖派の隆盛のただなかにあつてひとり盛唐詩の価値を提唱した嚴羽に対する同調・共感をここに読み取つたとしても、さほど牽強付会とは言えまい。

また『五山堂詩話』に対する批判意識については、次のような点にも目をとめておきたい。『非詩話』には、日本についての言及はまったく言ってよいほど見られない（巻二の末尾、中国の詩学著作の題目を網羅し

たあとに、わずかに「本邦學士大夫所著詩型、詩式、詩轍、葛原詩話、昇庵詩話等書、又無數、：」と触れるのみ)。しかしながら次の二節には、『五山堂詩話』に対する批判・皮肉が透けて見えるように思われる。

予嘗春深獨行溪上、作小詩曰、「小溪倚春漲、攘我釣月灣、新晴爲不平、約束晚來還、銀梭時掇刺、破碎波中山、整釣背落日、一葉軟紅間」、又嘗暮寒歸見白鳥、作詩曰「剩水殘山慘淡間、白鷗無事釣舟閑、箇中著我添圖畫、便似華亭落照灣」、魯直謂予曰、「觀君詩、說煙波縹渺處、如陸忠州論國政、字字坦夷、前身非篙師沙戶種類耶」：(冷齋夜話) ○詩話浮浪不根之談、固已可厭、況好錄自己所作、以誇揚其長乎、惠洪於詩道、無一毫見解、而其詩話、列已詩不一而足、今摘錄一二、而伎倆之拙、識見之卑、瞭然無待詳載、惠洪之錄之、未始非衒才矜能、而適自呈露其短、可憫笑也已、四庫全書提要以惠洪與張表臣、對舉而譏之、惠洪將何辭以免焉(卷六「稍工詩則自負太甚」)

詩話中に自作の詩を引いてその長を誇る『冷齋夜話』の愚を笑う一節だが、揖斐高によれば『五山堂詩話』に詩を収める詩人のうち、その収録数の最も多いのは菊池五山本人の百二十八首で二位以下を圧倒する。以下、柏木如亭、大窪詩仏、市河寛斎など、江湖社同人を中心とした五山の詩作仲間が大きな分量を占める。五山自らを中心とした江湖社の面々の身内讃めの談笑は、まさに「好錄自己所作、以誇揚其長」というおもむきを呈しているといつてよい。

五山における『隨園詩話』への模擬・同調、いっぽう『非詩話』における批判・否定。江戸後期の文壇状況を

肯定的にとらえ、その中での自己実現を試みた菊池五山と、これとは全く逆に否定的にとらえ、あるべき理想をかかげてその矯正・改革を企図した古賀侗庵。両者の詩話に対する対応・姿勢はきわめて対蹠的である。しかしながら、いざれも、長年にわたる中国文化攝取の豊富な蓄積を背景に、江戸後期の文学環境に根ざして生み出された著述であるという点では共通するのである。

歓迎をもつて迎えられた五山の書とは対照的に、『非詩話』はほとんど日の目を見ることはなく、成立した当初から江戸末期、明治期を通じて、抄本のかたちでわずかに行われたにすぎない。大正九〇～十一年（一九二〇～二二）刊の『日本詩話叢書』に収める計画はあつたようだが<sup>(7)</sup>、これは実現せず、ようやく昭和二年（一九三七）年、崇文叢書のなかの一部として刊行された。文化十一年（一八一四）の完成ののち、文政三年（一八二〇）には林檉宇（一七九三～一八四五、林家第九世、一八一九年儒官となり、一八三八年には大学頭に就任）の序を得ていながら、結局上梓されなかつたのは何故か。

侗庵自身、菊池五山らの声誉・権威が絶頂を迎えていた当時、世上に本書が現れた場合の反応を気にかけていたとおぼしい形跡が『非詩話』中に散見される。軋轢・摩擦をあるいは避けたものであろうか。右は憶測にすぎないのでけれども、次のような事実だけは指摘しておこう。

『非詩話』完成直後の文化十二年から翌十三年にかけて、江戸文壇では大きなスキャンダルが発生した。当時の江戸を代表する学者・詩人・画家などの品題（ランク付け）を一枚の刷り物（番付）にしたものが出回り、その番付発行の黒幕が、ランクの上位に掲げられた大窪詩伝と菊池五山その人であることが発覚してしまつたのである<sup>(8)</sup>。この事件はその後かなりの長期にわたって江戸文壇を揺るがしたらしい。かりに『非詩話』が刊行された場合、すなわちはつきりとは名指ししないものの、菊池五山および江湖社への批判意識を露わにした著述が世に現

れたならば、否応なくかかる騒ぎに巻き込まれる可能性を孕んでいたと想像される。『五山堂詩話』じたいもまた、本事件のあと、それまで続いていた年一回の刊行の中止を余儀なくされたのであつた。両著作ともに、「詩話」（あるいはその批判書）という、当時の文学環境に深く根ざした著述であつただけに、その文学環境の動向如何によって、運命が大きく左右されることとなつたといえるのではあるまいか。

## 注

本稿は二〇〇五年六月、台湾高雄で開催された東方詩話学会第四屆國際學術研討会において発表した稿の日本語版である。

- (1) 『五山堂詩話』のテクストは、新日本古典文学大系『日本詩史・五山堂詩話』（一九九一年、岩波書店）に影印付載のものによつた。
- (2) 『日本詩史』のテクストは、新日本古典文学大系『日本詩史・五山堂詩話』に影印付載のものによつた。なお本稿は、同書ならびに大谷雅夫・揖斐高氏の執筆にかかる「解説」に負うところが大きい。
- (3) 新日本古典文学大系『日本詩史・五山堂詩話』月報
- (4) 揖斐高『江戸詩歌論』（一九九八年、汲古書院）所収『五山堂詩話』論
- (5) このことについては、佐藤保『洞庵非詩話』について（『お茶の水女子大学中国文学会報』十四号、一九九五年）にも夙に指摘されている。
- (6) 『非詩話』のテクストは、一九二七年崇文院刊の崇文叢書本に拠つた。
- (7) 編者池田胤の「例言」。
- (8) この事件については、揖斐高『江戸の詩壇ジャーナリズム』（二〇〇一年、角川書店）に詳しい。